日本基督教団 高井戸教会

礼拝のしおり（2023 年 3 月号）

～主の御前に一つにされて～

> しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。それればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。
>
> （フィリピの信徒への手紙 3 章 7～9 節）

桜のつぼみも膨らんで来ました。

主の聖名を讃美いたします。主イエス・キリストの御受難、その十字架の御苦しみと死を覚えつつ歩む中で、今年度の歩みも終わりへと向かっています。最近になって、ある教会に生きた一人のキリスト者のことを改めて思い起こす機会が与えられました。既に天に召された方ですが、私にとっては忘れがたい方です。

私が初めてお会いした時、その方はもう 70 代の後半であったと思います。ご自身が属する教会の長老としての務めを担っておられました。教会のことを話す時にはいつも真剣でした。しかし、普段はいつもニコニコしておられて、どこか幼な子のような明るさを感じさせる方でした。一つの会社の責任あるポストにまで就いた方でしたが、ご自身のお子さんよりも年若い私のような者にも、偉そうになさることなど一度もありませんでした。むしろ私が、教会の牧師、伝道者であるというただそのことだけで、いつでも重んじてくださっていることを感じさせられました。

教会では、教会学校の教師として長く仕えておられました。小さな子どもや若い人たちが教会に来ることをいつも喜んでおられました。キリスト教学校の生徒で、教会学校に出席する中学生の女の子たちから、ニックネームで「〇〇ちゃん」と呼ばれて親しまれていました。また、その方のことで驚きを禁じ得ないのは、ご自分が属しておられた一つの教会における働きだけでなく、聖書を配布するギデオン協会の働き、複数のキリスト教学校の理事等の務め、市民クリスマスの企画と実行など、教会の伝道に関わる多くのことを喜んで担っておられたことです。

脳梗塞で半身に不自由を抱えて歩むキリスト者の妻を献身的に支えながら歩まれた方でもありました。ご自宅での食事の準備など家事もなさっておられました。そのような困難を抱えつつも、日曜日には欠かすことなく礼拝に集われました。お子さんたちが小さかった頃、運動会が日曜日であったので、お子さんたちの運動会に一度も出たことがないと言われていました。今の日本において、また私たち現代のキリスト者の間でもそのまま受け入れられない考え方かもしれません。しかし、私たちに対する一つの問いかけでもあると思わされます。

ある時、その方の歩みのルーツに何があるかを知りました。戦争中、特攻隊において二人の親友を失い、自分一人だけが生き残った。戦後、生きる道を求めて、教会の門をくぐり、イエス・キリストを信じて救われたその時に、亡くなった親友二人の分も含めて、三人分の人生を歩んでいこうと思われたのでした。まさにそれを貫いておられたようなキリスト者としての歩みでした。

最近になって、その方が、お子さんたちが小さかった頃、一緒にお風呂に入る時、かつての讃美歌集の讃美歌 361 番を歌っておられたことを知りました。「主にありてぞ われは生くる」と歌われる讃美歌です。別の節では、「主にありてぞ われ死なばや 主にある死こそは いのちなれば」、「生くるうれし、死ぬるもよし、主にあるわが身の さちはひとし」と歌われます。驚かされたのは、その方が、その讃美歌の「われ」の部分にお子さんの名前を入れて歌ったということです。そして、その讃美歌 361 番は、家族の歌となり、お子さんにとっての愛唱讃美歌にもなった。

誰にも真似できないようなその方の歩みだと思います。しかし、その方を生かした主イエス・キリストの救いの恵みは、私たちにも等しく向けられているものであることを、また思います。私が今用いている聖書は、その方からいただいた聖書です。その方のキリスト者としての姿は、私にとって、今でも大きな励ましであり、また問いかけです。

高井戸教会牧師　七條真明

日本基督教団 高井戸教会

☆3 月 19 日～4 月 9 日の主日礼拝、その他について（お読みください）

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21	聖歌隊奉唱 (讃美歌 21)
3 月 19 日（日）	ゼカリヤ書 8 章 20～23 節 ペトロの手紙一 2 章 11～17 節 「神の僕として生きる」	詩編 32 編	14, 297, 504, 27	566
3 月 26 日（日）	イザヤ書 53 章 1～12 節 ペトロの手紙一 2 章 18～21 節 「キリストの足跡に続くように」	詩編 42 編	13, 298, 303, 28	305
4 月 2 日（日） 棕梠の主日	イザヤ書 42 章 1～4 節 ペトロの手紙一 2 章 22～25 節 「魂の牧者のもとに」	詩編 102 編	2, 300, 81, 26	306
4 月 9 日（日） イースター礼拝	アモス書 9 章 11～15 節 ルカによる福音書 24 章 13～35 節 「復活の主イエスとの旅路」	詩編 16 編	325, 326, 81, 26	328

3 月 19 日以降の高井戸教会の主日礼拝等について、以下にご案内いたします。ただし、感染状況に大きな変化がある場合には、以下の記載とは変わってくる可能性もあります。その点をご了承ください。なお、変更する場合は、高井戸教会の週報やホームページでお伝えするようにいたします。

◎主日礼拝について

主日の礼拝については現在、1 回の礼拝(午前 10 時 30 分開始)に戻っています。どうぞ開始時間について、お間違えのないようご出席ください。

なお、手指の消毒、ディスタンスをとっての着席、マスクの着用等の感染対策は続けていますが、感染に不安のある方、体調の優れない方は無理をなさらず、ご自宅で礼拝をお捧げください。

毎月第 1 日曜日の礼拝においては、聖餐式を行います(安全を期して、市販の聖餐用の個包装のウエハースとぶどう液を用います)。

毎主日の礼拝のライブ配信（礼拝の生中継）も続けて行っていますので、ご自宅において動画を視聴しながら礼拝を捧げることができます。ライブ配信を視聴したい方は、高井戸教会までご連絡ください（TEL 03-3333-2465)。

また、礼拝説教の動画のアップロード、『礼拝のしおり』の発行も続けています。どうぞご利用ください。

◎子どもの教会について

幼小科は、毎日曜日午前 9 時から行っています。礼拝堂で礼拝を捧げ、9 時 20 分より分級を行います。幼小科の分級は礼拝後、1 階大集会室において、また同じ時間帯に父母分級が 1 階小集会室において行われます。（※幼小科は、3 月 26 日と 4 月 2 日は春休みです。）

中高科は、毎日曜日午前 9 時 30 分より、2 階会議室において行っています。

◎オンライン祈祷会について

Zoom というアプリを用いてのオンライン祈祷会を、毎月 1 回（第 1 日曜日の午後 5 時より）行っています。

◎その他

求道者会、壮年会例会、バイブル・クラス等、さまざまな集会が少しずつ再開されています。どうぞご参加ください。

日本基督教団 高井戸教会

2月の礼拝説教から（＊2月26日の礼拝説教の要約）

「草は枯れ、花は散れども」（ペトロの手紙一 1章22～25節） 牧師 七條真明

聖書の中には、時の流れの中に見出すことができる自然の姿、その営みに目を向けながら語っている箇所が数多くあります。ペトロの手紙一において、第1章の24節から25節にかけて記される御言葉も、その一つと言えるでしょう。「草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」。

「草は枯れ、花は散る」。草花が、枯れ、また散っていく。誰もが知るその草や花の姿を見つめて、過ぎ去るもの、うつりゆくものが、草や花の姿に託して語られています。どれほど青々と茂っている草も、またどんなに華やかに美しく咲き誇っている花も、やがては枯れ、散っていく。草も花も一時のもの。それが過ぎ去り行くものの姿にたとえられるのは、古今東西に共通するところであるかもしれません。

けれども、この「草は枯れ、花は散る」という聖書の言葉は、ユダヤ・パレスチナという場所、聖書の大地を背景として語られたものだということを思わされます。それは、私たちが想像する以上に苛酷な環境を背景として言われている言葉なのだということです。イエスさまが、「今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ」（マタイによる福音書第6章30節）とおっしゃったのは、決して誇張などではなく、まさにそれが現実のこととして言われているのだということを知ります。ある日の朝、色鮮やかに咲き誇った一面の花々が、非常に乾燥した風によって、その日の夕方には、文字通りみな枯れ果てている。そういうことが現実のこととしてあるのだそうです。

「草は枯れ、花は散る」。しかし、ここで語られているのは、ただ草や花のことばかりではないのだということを改めて思います。草や花の姿に託して、過ぎ去り行くもの、うつりゆくものがここで語られている。そして、その何よりも具体的なこととして語られているのは、私たち人間のことです。それは、24節において、「草は枯れ、花は散る」という言葉に先立って、こう記されているからです。「人は皆、草のようで、その華やかさは、草の花のようだ」。草や花の姿に託されて語られているのは、何よりも人間のこと、私たち人間のことなのです。

このペトロの手紙一第1章24節～25節の御言葉は、旧約聖書のイザヤ書第40章の6節から8節までの箇所からの引用です。旧約聖書の時代、神の民イスラエルと呼ばれた人々が歩んだその歴史の中で、ダビデ、そしてソロモンという人々が王となった時代に、イスラエルの人々は、これ以上はない繁栄の時代を経験しました。物質的にも、経済的にも、さまざまな意味で栄華を誇るような時代でした。しかし、やがて王国は二つに分裂し、北王国は滅び、南王国もまた滅びるという経験をすることになりました。

「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る」。すべては過ぎ去り行く。私たち人間もまたそうだ、と。それは、王国の滅びを経験し、「バビロン捕囚」という、大きな苦難の出来事の経験を経て語られている言葉です。国は滅ぼされ、王国における主だった人たちは外国へ連れて行かれた。この「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ」という言葉は、望みなき時を過ごすことになったイスラエルの人々の、誰もが深く頷かずにはおれない思いをよく表している言葉であったと思わされます。

けれども、そのような、すべてはうつろいゆき、確かなものなど一体どこにあるのかと誰もが思わずにはおれないような時代の中で、人々に語りかけるように、と遣わされた預言者の言葉が指し示すのは、ただ単に、すべてはうつろいゆく、過ぎ去り行く、人間もまたしかり、というそのことにとどまるものではありませんでした。ありとあらゆるものが過ぎ去り行く、すべては不確かなものに過ぎない。そのように思える時代の中で、そうではないもの、決して過ぎ去り行かないものがある。私たちのもとにとどまり続けるものがある。私たち人間を本当に生かすものがある。それが、草は枯れ、花も散るだろう、「しかし」と言って語られ、指し示されるのです。「しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」。

自然における草花の種は、やがて朽ちる。その種そのものが過ぎ去り行くもの。しかし、神の言葉はそうではない。決して変わることなき生きた言葉として、朽ちることがない種として私たちの心に植えつけられる。その朽ちることのない種、あなたがたの内に植えつけられた神の言葉、永遠に変わることなき生ける神の言葉によって、あなたたちは新たに生まれさせていただいた者たちだろう、と教会に生きる者たちに語りかけられている言葉がここにはあります。神がお送りくださった御子イエス・キリスト、その御方を通して、私たちを滅びではなく真実の命に生かそうとなさる神の語りかけ、神のまことなる言葉そのものであるイエス・キリストを信じて、洗礼の恵みにあずかって、教会に生きている者たちへの語りかけがここにはあるのです。ペトロがこの手紙を通して語りかけたのは、迫害の時代の中で、自分たちの命もまた過ぎ去るほかないと思っていた、教会に生きるキリスト者たちでした。